

毎月1回20日発行

第3種郵便物認可(昭和31年3月28日) ①

# 山と博物館

第4巻

第3号

1959年3月20日



雪の針ノ木峠

大町山岳博物館

# 針ノ木峠に関する資料

高橋秀男

て針ノ木峠に関しては調査報告「針ノ木岳」に年譜として編んでいます。ここでは年譜に関係ある資料を紹介いたします。大半、発表されたものを針ノ木峠に焦点を絞って編集したのですが、歴史的にゆかりの深い峠を中心に過去を振り返って見ると大変興味深い問題が沢山残されています。まだ完全なものとはいえませんが、今まで調べたところを発表します

なお富山県側の資料の全ては富山県立図書館広瀬誠氏近代アルピニズムになっては日本山岳会古原和美氏、その他北安曇郡誌編さん改訂委員会のご協力を得ています  
①永録頃（富山県郷土史家木倉豊信氏の説では永録12、3年頃と推定しています。）

寺島職定下知状（立山芦くら寺文書）

急度申越候、仍信州へ罷透之儀先以可相留候、此上於罷越者、諸商人可令成敗候、此段横江太郎兵衛ニ可申聞候猶口上ニ申出候、謹言

二月廿六日

職定（花押）

芦くら寺門前百姓中

（中島正文「針ノ木峠考」）

〔詳〕戦国時代すでに針ノ木峠越の交通があったことを物語る古文書で、商人等の信州への越境を厳重に取り止めたもの（広瀬）

## ②天正12年佐々成政の佐良越

万治4年小瀬雨庵著「大関記」八巻に佐良峠越えの模様を佐々木内蔵助真忠雪中さらさら越え之事の中で「雪になつまぬわかきはらを百人ばかりめしつれ、大山の嶺わきに攀り上り南を見れば上下に里ありとおほしくて紫折くふる煙たえだえ也。いざ煙を心あてに下りみると、かんじきというものに乗ておとしければ真忠の心ざしを天感じ給うにや、思いの外やすやすと麓の里に著きにけり。民のかまどに立入らんことのうれしさに、案内をもせず入りしかば、老いたる樵夫胆を消し、是は変化のものぞかし、今此雪中に人間のわざにはあらじと不審しあえぬ。小姓の長、建部兵庫頭といひし者、いやとよ越中より信州深志辺へ心ざす人にてあるぞ、宿かしまいらせ道の案内をもせよ、汝等心やすくあらんほとと引出し物給へしといひしかば、それより、いとねんごろにもて糞しけり。越中外山の城を十一月二十三日に出で、十二月朔日午の刻に上諏訪に著したり」と述べている。

（山崎安治：穂高星夜）

「秀吉和を信雄に乞ふ、信雄之れを許す、成政以爲らく信雄セン弱事を共にするに足らず、宜しく家康と好を

結び以て中原を図るべし乃ち兵を罷め病と称し、潜かに左右数と深雪を凌ぎ左良越之間馳駆12日浜松に抵り……」また黒百合の伝説に起因するものに、「佐々成政立山の佐良佐良越えを越えて信濃甲斐駿河遠江尾張を経て帰国するやそしるを信じて愛妾早百合及び其一族十八人を斬殺す早百合甚だ之を怨み死に臨みて立山に黒百合咲かば佐々家滅亡せんと罵り呼びしとか、其後天正十六年淀君の用ひ給ひし黒百合の挿花因となり、遂に身を殺らし家を亡ぼすに至れり」（志村烏嶺：やま）

加賀藩の学者富用景周著「越登賀三州志」で十一月、二月の冬季はこの方面の通行は不可能なこと、十月に信雄と秀吉との間で和議が所立していることなどから大関記に七月が十一月と誤記されたものと異説をとなえている。

## ③慶長3年

越中新川部黒部山の儀委敷聞善敷候、謹言

慶長三年二月

利家在判 浦山村 伝右衛門

（下新川郡史稿）

加賀藩主前田利家 浦山村の松儀伝右衛門を召し黒部奥山の事情を聴取したもので、木倉氏は事実であったろうが溯って偽作した文書だといっている。

## ④寛永17年

新川部黒部奥山の儀見聞歡喜之事ニ候、併深山之内□□等有之儀不審成事之候条は以後モ浪人山賊体之者忍居与且山越ニ他国通路之徒等者於有之ハ召捕可訴出候將鏡硯扇子令拜領候 不明 □□ 内役儀無怠慢心懸尤口外相慎不知不慮可相勤事

寛永十六年十二月

中納言利常在判

新川郡老百姓 浦山村 松儀伝右衛門

（下新川郡史稿）

この古文書についても木暮氏は③と同様のことをいっている。

## ⑤慶安元年芦くら村十三郎由緒書

微妙院様（利常）江戸よりの御登の刻……佐々陸奥守殿上下御通被成候、さらさらこえの道筋為御見分、岡田助三郎殿、大島甚兵衛殿、金森長右衛門殿被為遣候間親三右衛門、私兩人ニ案内仕罷越……同年7月3日ニ右さらさら越仕夫より信州野口村領之内馬留と申所迄右御三人案内仕り同七月十二日ニ芦くらへ罷歸り……七月二十一日小松え罷登、さらさらこえの次第黒辺谷え様体絵図仕上申候。

(杏文庫蔵 中島正文:黒部奥山と奥山廻り役)

⑥慶安元年 奥山廻役喜右衛門記録

「…越中界より信州馬留迄略間にてメ五千拾六間有り是を里とに式里拾壹丁三拾六間有。」

(中島正文:黒部奥山と奥山廻り役)

針ノ木時付近の測量の結果である。

⑦元禄元年 芦くら寺一山文書

古代度々争論記

一、信州ヨリ同行拾貳人立山え山越ニ参リ申候所ニ芦くら村ヨリ案内者共室堂ニ而改申ニ付岩くら寺山番方ヨリ人ヲ添若くら寺えつれ下リ候ヲ私共改メ候得ハ信州松本領宅本木村ト申処之由口上書私共方へ取置申候ニ付御断申上候之以上

元禄元年七月二十二日

立山芦くら衆徒中  
社人中

黒崎村三郎兵衛殿

(芦くら一山会蔵 中島正文:黒部奥山と奥山廻り役)

⑧元禄六年 奥山廻役宗兵衛記録

私共之儀毎々之通奥山廻ト六月十八日ヨリ境川奥黒部奥山見分仕リ七月二日ニ罷帰申候、同七月廿三日ヨリさら越見分仕りはりの木谷大川出合ニ而いはな釣申小屋掛置魚釣申かと一両日致逗留見分仕候へとも小屋の跡も無御座候魚釣人も相見へ不申候信州境を見分仕り夫ヨリ黒部水干飛州境迄罷越見分仕り八月十四日三罷帰申候当御領境目筋相替義無御座候以上

元禄六年八月十五日

内山村 三郎左衛門  
下梅沢村 市郎右衛門  
太田本江村 宗兵衛

今村市十郎 殿

今井源五兵衛 殿

⑨元禄七年 奥山廻役宗兵衛記録

……黒部川はりの木谷出合ニ而信州仁科郡けんきょう村長三郎源七同郡大町三郎左衛門矢九郎此五人罷越小屋掛いはな釣申を見付け候ニ付向後比御領之罷越申間敷段々委細隠度申候へば右五人之者共殊の外迷惑仕り重而参り間敷と申小屋こぼさせ相返し申候

(杏文庫蔵 中島正文:黒部奥山と奥山廻役)

⑩正徳二年七月

「正徳二年はりの木谷へ信州之者共入込候ニ付取申紙面え写」として「尾張国あすみ郡なかかわ村 太郎右衛門 喜三郎 伊左衛門 彦左衛門」が差出した始末書。「私共両国御さかい山は遠国の者に御座候へバかつて以不奉な」と弁解しているが、尾張は御三家なので、さすがに加賀藩も遠慮して寛大な処置をとる。しかし奥は信州あつみ郡なかかわ村であるのを尾張と偽ったもと中島正文氏は考証している。

(杏文庫所蔵 中島:黒部奥山と奥山廻り役)

この事件について信州側西沢文書

「野口だいら山枕頭上書」のうち

一、勘左エ門申候は、其方達は何方の者にて御座候やと尋ね申候、此方にて杵共申候は我等共は尾州木曾領の百姓にて候、松本領の元締に頼まれ金借り年々此上にて板批申候、元締申付候は川より此方にて伐り候様に申付け候一、勘左エ門申候はみね界にて加賀分の山にて御座候、定めて元締の了簡違にて此方山へ入申と存候、早々仕舞掃り申すべきと申候、此方より杵共申候は大金金子借り申故に元締へ申遣し差図次第に仕るべく申候

.....

正徳二年辰七月 大曾奈川須寄合沢村枕頭 喜三郎

(以下六名連署)

(中島正文:山手帳抜書三「山と溪谷」)

〔註〕 勘左エ門は加賀藩の役人である。

⑪安永四年 佐伯記録

「黒部大川側二人之足跡有之候故其跡ニ付相尋候得ハ信州松本御領内しんきり村之者之由ニ而三人罷越居リ申候段々詮義仕申候所ニ弥くいはな釣と相見之申候向後参不申様ニ隠度申渡相逃シ申候、尤小屋も焼払申候」

「先達御公事場へ御引渡被成候信州安曇郡高根新村友右エ門せがれ三吉義於御公事場ニ被為遂御吟味候処、当御領黒部奥山へ立入材木等致盗伐仕候義ハ去々年来之義ニ而則其比与小屋建置候由申候.....

⑫安永四年 佐伯記録

黒部奥山盗伐の場所御払木ノ儀ニ付信州之者願え趣御作事奉行申聞段々遂詮義以上 別紙写之通先為試御払之儀承届御作事奉行申渡候尤買人登山之節ハ伐出奉行指添見届候様ニ申渡候条被為得其意指支不申様ニ可被御心得候以上

十月二十四日

横山河内守

(杏文庫蔵)

⑬安永四年 佐伯記録

覚

一、貳百三拾本 根伐樵 但シ立木宅本ニ付貳拾貳匁宛

代金 百両  
内金 三拾両 当十一月廿日切隠度金沢表之持参上納仕候

金 四拾両 来申年七月十四日迄右断  
金 三拾両 同九月十日迄右断

右之通約束打極信州向寄ニ而野口村与伐出候 尤来申年一ヶ年且又当十一月廿日切金子持参之御本切手取替奉申上候 以上

未十月 領主 信州松本野口村 西沢九郎七  
代印 松本大町 伊藤五郎左衛門

金沢御作事所様

雪を  
彩る

# 冰雪植物について 1

長野県白馬高等学校教諭 小野貞雄

晩春から初夏にかけて高山や積雪地方にしばしば現われる着色雪については、本誌の第3巻10号に記しましたが今回はこの着色雪の原因である氷雪植物についてお話してみたいと思います。

## 氷雪植物

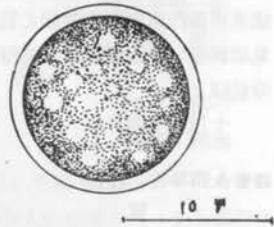
氷雪植物とは、ある特殊な藻類や菌類、或は細菌類の如きもので、生活史のあの期間を氷や雪の中で好んで生活するものを云います。しかし着色雪の中に見出されます微生物は氷雪植物ばかりとは限らず、氷雪以外の場所でも生活出来ますが、氷雪に好んで生活する好氷雪性のものや、風などに飛ばされて来て偶然にも氷雪の上に落ちて仕方なしに生きているもの(第13図)、或は氷雪に封じ込められて死んだもの(第24図)も含まれています。着色雪を構成しています微生物もたゞ一種類のみから成るものは少なく、多くは3、4種類以上の微生物から成っております。

次に具体的に北アルプス白馬連峯を主とした着色雪を構成する2、3の生物の形態、ならびに生態につき記してみます。

## 氷雪植物の形態

### 1、Chlamydomonas nivalis (Bauer) Wille (クラミドモナス ニバリス)

緑藻類のクラミドモナス科に属し、赤雪、赤褐色の主要構成種として知られていましたもので、単細胞は独立しており、遊走子、厚膜胞子、接合子を作ります



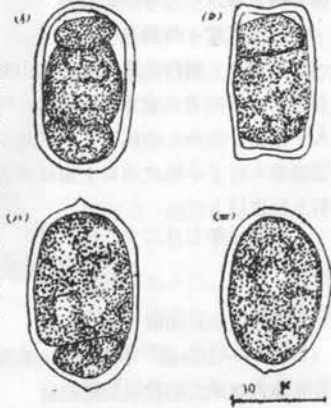
第1図 Chlamydomonas nivalis

赤雪、赤褐色の主要構成種であります。黄、黄緑、褐、緑褐、緑、暗緑、黒色等の着色雪の構成種でもあります。これらの着色雪から見出されます胞子は円形の厚膜胞子で、径6~24ミクロン無色の細胞膜を有し、外層のものは割合に厚く平滑であります。緑藻類は細胞内に高等植物と同様の葉緑素を含有しており緑色を呈しておりますが、ピンク、血紅、赤紫、赤褐色等の赤雪系の着色雪内に見られます。本種の厚膜胞子は、細胞内にヘマトクロームと云う色素を含むために綺麗な赤褐色をしています。

### 2、Oocystis lacustris Chod. forma nivalis Fritsch (オオシステイス ラクストリス フォーマ ニバリス)

緑藻類のオオシステイス科に属し、緑雪の主要構成種で赤雪及び黒雪にも多く見出されております。

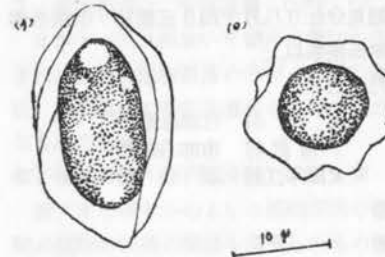
細胞は単独生活をし楕円形や亜卵状楕円形、或は両端部の尖円状のもの又、まれに長方形のものなどがあり、長さ12~21ミクロン、巾9~15ミクロンであります細胞には葉緑体を有し先端に油滴を有するものがあります。



第2図 Oocystis lacustris f. nivalis  
(a) 楕円形 (b) 長方形 (c) 両端部尖った楕円形 (d) 先端に油滴を有するもの

### (スコチーラ ニバリス)

緑藻類オオシステイス科に属し、すべての色の雪に見出されていますが、赤褐色、褐色、緑褐色雪の主要構成種であります。



第3図 Scotiella nivalis  
(a) 波状の翼 (b) 先端部小さな突起

細胞は独立し亜紡錘状又は楕円状素絨形で、細胞膜は8迄の隆起を有し波状の翼をなし(第3図)先端部は小さな突起で

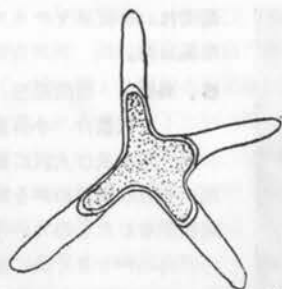
終わっています。長さ18~33ミクロン、巾9~18ミクロンであり、葉緑体を有し、黄赤色の油滴を含有しています

### 4、Chodotella brevispina Fritsch (コウダテラ プレヴィスピナ)

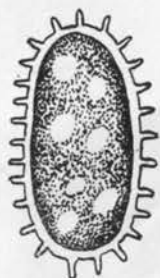
緑藻類オオシステイス科で緑雪の主要構成種であり、赤雪にも普通に見られております。細胞は単独生活をし楕円形、稀に亜卵状楕円形をなし、長さ18~35ミクロン、巾約7~14ミクロンであって、表面は比較的丈夫な刺で被われています。刺の長さ約2.1~2.8ミクロン、尤端は亜裁頭状であります。

### 5、Chionaster nivalis (Bohl.) Wille (チオナスター ニバリス)

本種は菌類で、北アルプスの赤雪に少量に存在しております。普通単細胞無色の3~4本の円柱状鈍端薄膜の突



第5図 *Chlamydomonas nivalis* 10 μ



第6図 *Scotiella brevispina* 10 μ

起をなしており、又一本の棒状形のものもあります。突起の大きさ10~25ミクロン、巾4~5ミクロンであり、細胞の隔膜はなく葉緑素を欠き、中央部に淡黄灰色の油滴を有しております。

その外氷雪植物として菌類の *Selenotila nivalis* Lageth (セレノテイラ ニバルリス) や緑藻類で種名の不明な *Chlamydomonas* spp. (クラミドモナス種) 及び、氷雪動物と思われる原生動物や輪虫類 (第12図) も見出されましたが、個体数が非常に少なく、着色雪の主要成生物でないので省略致します。

### 生態の観察

着色雪を構成する微生物の種類については光線の強弱、地域、地形、森林の有無及びその種類に異なります。又着色雪の色も微生物の種類や有機物、鉱物質、花粉、毛茸の含有によりいくつかの色に区別せられます。(本紙第3巻10号2頁参照)

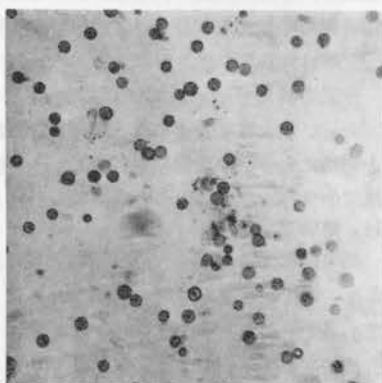
#### (A) 雪の色彩と氷雪植物

着色雪が示す色彩と氷雪植物との関係について、筆者の観察した結果を纏めて見ます。

①ピンク~血紅色：強い太陽光線の当る雪渓に発生します。この赤雪には、*Chlamydomonas nivalis* の一種類が非常に多数群棲しておる場合(八方尾根、唐松岳、白馬大雪溪、白馬ヤリ岳)と、その外に極く僅か *Scotiella nivalis* 又は、

*Oocystis lacustris f. nivalis* の一方か、両者を含んでいる場合(雨飾、猿倉白馬尻)とがあります。

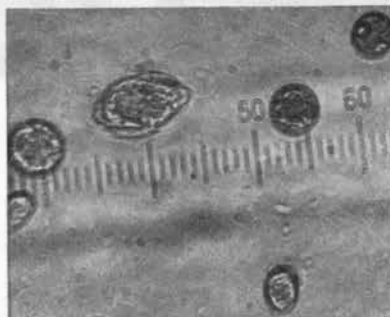
②赤紫色~赤褐色：この系統の赤雪も前記のものと同



第6図 ピンク~血紅色系を構成する *Chlamydomonas nivalis* (250X)

様太陽光線の遮るものない光の強く当る場所に見られますので、構成生物も全く同じであります。前記の赤雪に少しの鉱物質が舞い込みますり赤紫色となり、更にこの外に花粉や毛茸等が入り込み、雪渓が汚れるに従い赤色から赤褐色となり、暗褐色になります(8図)。又多量の土砂の浸入したも

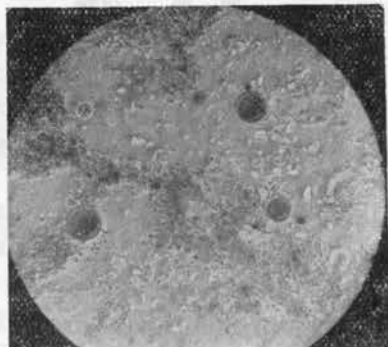
のは黒雪又は、汚雪となっております(八方尾根、唐松岳、大雪溪、ヤリヶ岳)。烏帽子岳の赤雪にはこの外、極く僅の *Selenotila nivalis* も見出されています。又白



第7図 血紅、赤紫色雪を構成する微生物 円形…*Chlamydomonas nivalis* 棒形長方形…*Oocystis lacustris f. nivalis* 紡錘形…*Scotiella nivalis* 1目盛は3.5ミクロン (600X)

馬大雪溪のものからは珪藻類が発見されています。ピンク~赤紫色色素の赤雪が発生します雪質は、汚の少ない粉雪※

※カザラメ雪であります。そのため着色雪の形態も風の当る場所に於いては帯状に分布し、大きなものは長さ10~15m、巾30~60cmに達しております。比較的



第8図 赤褐色雪、暗褐色雪を構成する *Chlamydomonas nivalis* と鉱物質(黒色顆粒体) (450X)

は1m内外、小は4、5cmの円状や、或は種々様々形態をしております。そして中心部ほど濃く、これより遠ざかるほど薄くなっています。又、深さについては雪質や含水量及び、積雪量にも影響されておりますが、5cmから深いものになりますと30cm余に達しております。そして上部ほど濃く、深まるにつれて薄くなっております。赤褐、暗褐色及び汚雪のものは、発生する時期も遅く汚れた雪渓に、ピンク~赤紫色系の赤雪の間や、これらの後に発生しております。従って雪質も水分を含んだザラメ雪に見られ、その形状も小さいのです。



図書  
紹介

# 針ノ木岳

## 自然と保護

本年度本館学芸員、調査員、信州大学学生によって行われた針ノ木岳調査は「針ノ木岳——自然とその保護——」という単行本になって4月上旬出版されることになった。B5判、約170頁、アート写真10ページ、第一部、第二部に分かれ、前者は保護、後者は自然となっている。以下第一部の目次にとどめ、第二部の自然科学の中から注目されるものを簡単に解説した。

### 第一部 保護

針ノ木自然園の構想	羽田 健三
針ノ木自然園の野外博物館	平林 国男
	平林昭一郎
スキーと自然	福岡 孝行

### 第二部 自然

1、気象:	海川 庄一
2、地形と地質:	平林 照雄
3、大型哺乳類:	羽田健三、千葉琳司

哺乳動物の生態分布を数百人にのぼる人々から観察例の情報の蒐集と針ノ木岳周辺の糞を採集しまとめたものである。北アルプスにおける大型哺乳類の社会生態学的研究と糞学による研究は始めである。サル、クマ、ガモシカ、キツネ、テン、ヤマイタチ、イタチ、ヤマネ、アナグマ、タヌキなどの水平、重直分布、食性を明きらかにし、サルについては遊牧圏を推定することができた。

### 4、ネズミ類: 羽田健三 清野利弘 小林作栄

針ノ木岳の採集種類は3科6種(ヒメヒミズモグラ、ホンシユウトガリネズミ、タネズミ、アカネズミ、ヒメネズミ、ニイガタヤチネズミ)でタネズミを針ノ木小屋内で採集しているが、北アルプスでは初めての例である針ノ木岳における優占種は亜高山帯ではヒメネズミ高山

帯ではニヤガタヤチネズミであった。

### 5、鳥類: 羽田健三 長

沢修介 小林重勝

針ノ木岳及び大沢に観察地点を設け野鳥の声を24時間観測をしたもので、今後の野鳥の声をきく会に備えた。観測種類は針ノ木ではライチョウ、イワヒバリなど5種類、大沢ではホトトギス、コガラなど7種類、両地点で観測したものにはメボソ、ルビタキなど5種類であった。これらの鳴声を日週変化、出現個体数と鳴声数、地鳴きと嘔り、鳴声構造の解析、重直的變

域、生活様式などを考察している。

### 6、水棲生物: 落合照雄 倉田悟

龍川水系の生態的な要因になる水温、PH、化学成分を調査し、水棲動物、底棲性藻類の生態を論じ、水棲生物の目録を付している。

### 7、植物群落: 平林国男 山崎 惇

日本アルプスにおいて始めて植物の生態学的研究がなされたもので植物群落の分布、代表的植物群落構造の解析、林床植生の季節的遷移の三つの観点から調査を行ったものである。

### 8、植物生長: 平林国男 和田 清

針ノ木雪渓を中心とした植物群落の帯状構成と積雪期間の植物の生長の関係を調査したものである。

### 9、脊椎動物フアウナ: 羽田健三 長沢 武

哺乳類9科25種、鳥類30科75種、昆虫類4科8種、両棲類3科6種、魚類3科5種が針ノ木岳で記録できた。

### 10、無脊椎動物フアウナ: 倉田 絵 前 茂 鉄也 福島 融 矢島庸助

今回の調査でヒメハマキガ科、ハマキガ科、カマキリムシ、ゾウムシに各々一種の新種又は日本未記録を記録その他にも多数の珍稀種を採集した。昆虫類は64科367種であった。

### 11、植物フロラ:

高等植物89科747種を採集した。新産地として採集したものにオオヤマレンゲ、ヤツガカケタンポポ、シロウマイタチシダ、ソノバヤマハハコ、シロウマオオギ、ケハギ、ヒメウメバチソウ、ヤマラキヨウ、ミサキカグマミヤマホソコウガイゼキシヨウなどある。

付 録

針ノ木開発年譜

高橋 秀男

## 山と大町のことなど

東京野歩路会幹事 塚本福治郎

この町を基点として、幾つかの山行を試みて思う事の数々は、そのいづれもが山と呼吸している、歴史の話に興味をひかれるのです。とりわけ古いと云えない年代ではあるが、現在の岳界先輩の由緒と結び付いて私達には嬉しい。対山館を始めとしての大町、そう云った環境を基点とした幾つかを辿ってみたい。

### 安曇節のこと

安曇節を口ずさむと、脳裡に山岳条々と起伏し展開してくるのは私だけではあるまい。その安曇節を何とか覚えたい。先輩が絶妙？の節廻しを、鳴らして居るのを聞いて一生懸命覚えたもので、然しそれが正調であらうとは思えない。そこで一度地元の姐さん方の、美しい姿と喉を聞かせて貰った方がと、山仲間で一決した。山屋ありスキー屋あり、中でも岩屋から屋根屋と、細く分けられる天狗の多い連中も、こう云う事となると計画がスムーズに行くのも、これに安曇野に愛着を感じている証拠であろうか。

さて一夜漬の安曇節、夜も深更に至る迄、即席カレーならざる即席安曇節の、大家が出来た訳である。さあこうなると、山の頂きに惱しくも妙えなる節を、歌わなければ納らない。早速北鎌尾根登攀の行路、全天星降る千天出合で試みる事になった。

上手に踊れたかって？ハア踊れました。炭抗節とのミックスされたものが……………。

でもそれから節の方は、何処の山へ行っても山霊に捧げる夜は、そこはかとなき旅情をたゞよはせて、頂から頂へ谷から谷へ暫くは耳を傾けたくなるような、切々たる声が聞えるようになったと、書いて安曇節の事を了えよう。

### 黒部の主、冠先生と旅して

もう何年前か、始めて下の郷下へ入った事があった。その時より以前から先生の書を読み、話を聞いて偉大な

先覚者として、尊敬の念を抱いていたが、私達のシネクラブで湯俣から伊藤新道を通って雲の平に行き黒部源流を尋ね行きし日の、黒部に回想を結ぶと云う計画に先生の同行が決った。嬉しい知らせは、私の一生の深い思い出の山行、それも大町から始った。

駅前の桜井氏もかって同行された一人とか、好意の御配慮に順調に湯俣入りが出来、振り返る針ノ木岳、安曇野に立つ巨人の峯は、未だ見ぬヒマラヤンピークの様に行き冠先生の思い出を話し乍ら歩れると、その峯も前方の北鎌槍も、岳が物語り気な表情に見えるから不思議である。

千丈、天丈、北鎌皆思い出のある道であったが、今日歩む新道は三ツ又小屋伊藤正一氏の開かれた道、噴湯丘を見、鬼ヶ城を右にし、快い登りをムービーに納め乍ら第一渡橋点の天狗菱(冠先生命名)を過し、赤くたかれた峡谷を半日、左手に末期的な廃虚の山稜、赤硫黄も真近く見える地点に幕営。翌日三ツ又小屋入りした訳である。目に沁みる緑、まばゆい残雪、偃松のグリーンベルト、それよりも先生の目には、多く行き交う登山者の群像が、どんなに若々く見える事だろうし、変らざる山野の風情は懐しく見えたであろう。

神秘的湖面を鷲羽火口に訪ね憩で、最後に本流を横切り、祖父岳山腹より雲の平に坐し、霊峰薬師に対し祖父岳頂上に至り、黒部本流を俯瞰したのである。

氏の黒部を愛し、山と自然に限り無き愛情を持ち続けたる生涯を思う時、薄暮の山頂に三ツ又伊藤氏ムービーの三成氏と俱にその側に居ると、行きし良き黒部の昔、来るべき黒部を慎じられ、感慨無量のものがあった。

その時、先生は百瀬氏の事、大町の昔を語られて居たので、その時の旅も今こうして書いていると、やっぱり大町との連りを感じられた訳である。大町トンネル開通御前谷ダム等、貌を生む要素要因は多いが、そこに立つ山々がある限り、私達には大町と云う響きをいつ迄も伝えて貰いたいものである。



## ジヨウビタキ

長 沢 修 介

黒色の翼に白斑のあるのが良く目立しいことも人一倍でち紋付鳥とも呼ばれている。そしてその名の通り礼儀正しいことも人一倍でいつも頭をベコベコ下げて尾を上下に振っている。三月の暖い日を受けて「ああ、あの枝だったな、渡って来た時沢山実のなっていたのは、この木のこの枝には去年の春もこの実が残っていたっけ」とヒツ、ヒツ、カタ、カタと独言を言いながらナマウルシの実をなつかしそうに尾を振りながら食べていた。

# 藓類の見分け

学芸員 平林昭一郎

高等植物の研究が進むにつれ、これに平行して藓苔植物も近年いじりしく研究熱が高まってきた。コケは藓類(オオミズゴケ、スギゴケなど)、苔類(ゼニゴケ、ジャゴケなど)、地衣類(ウメノキゴケ、ヨコワサルオガセなど)に大別されるが、このうちもっとも親しみやすく調べやすい藓類の種類の見分け方について、その基本的な方法を逐次紹介し藓類調査の参考に供したいと思っている。

## (1)スギゴケ科の藓類

コケというと誰でもすぐスギゴケを思い出す位藓類にとって代表的なものの一つで、特種な種類以外は世界的に分布しておりまた、垂直分布も広く庭先から3,000m級の高山帯まで生育している。今までの調査によると世界で14属、そのうち日本では7属(スギゴケニワスギゴケなど約60種類(変種、品種とも)知られている。

まずもっとも身近に生育しているカギバニワスギゴケを採集し、葉の横の断面をつくり顕微鏡の底倍率で観察すると、薄い板状の細胞(薄板-ラメラという)及び



図1、カギバニワスギゴケの葉の横断面

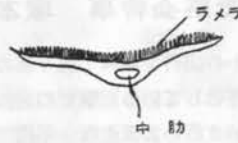
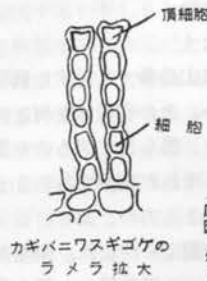


図2



カギバニワスギゴケのラメラ拡大

図3、各種類のラメラ拡大

中肋が見られる。【図1】次に高倍率で見ると、カメラは45~54列で5~6の細胞の高さからできており、その一番上の細胞(頂細胞という)は他の細胞より巾が広く先が少しへこんでいることがわかる。この頂細胞の形や大きさ及び細胞膜の状態はスギゴケ科藓類の種類を見分けるうえの大切な区別点になる。【図2】代表的な種類のラメラ拡大と比較して見るとその違いが一層はっきりする。(1、カギバニワスギゴケ雌株 2、雄株)

## 本年度より明年度へ

### 経過と計画をみる

博物館の明年度予算も 3238000円ときまりました。今年をふりかえりつゝ、明年度の計画をのぞいてみましょう。まず本年度行われた主な事業は上原遺跡、信濃考古展(4月29日~5月5日 博物館2565人) 自作スライド講習会(6月22日 共催20人) 東京教育大学博物館実習(7月10日-14日 15人) 奈良帝塚山学園夏季林間学校(7月17-21日 164人) 山の自然科学教室(7月26日-30日 八方山 162人) 交観生物教育研究会(海と山を結ぶ会共催 白馬岳72人) パタゴニア探検写真展(8月19日-21日 共催500人) 文化祭(11月1日-5日 共催 500人)その他少年野外教室、染色会、スキー百科展後援(資料出品)など普及活動にあわせ調査活動は針ノ木岳周辺の自然科学総合調査が行われました。資料寄贈には鈴木牧夫、志

村寛、田中邦雄、曾根原真夫、高頭仁兵衛、遺族、冠松次郎、片桐匡、志村寛門田茂、前田鉄之助、石岡繁雄の諸氏から各種資料。また石岡氏からはナイロンザイル事件に関係する全資料の寄贈を受けました。本館登り口の道路整備や新しく簡易水道も引かれています。

さて明年度に目を転じると、普及活動では巨例の山の自然科学教室、文化祭や少年野外教室に、春の特別展、地元対象の自然科学教室など予定されています。調査活動では針ノ木岳に続いて黒部溪谷まで足を延ばす計画と郷土民俗歴史資料の収集も予定しています。出版物は昭和31年行われた居谷里の総合調査の報告集(研究報告)が7月出版されます。工事関係では都市公園法による野外劇場の建設、館入口案内版、山岳展望図説板が設置されます。展示資料で現在予定されているものには山岳模型、山小屋模型の製作があります。

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料170円(郵送料とも)を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

山と博物館 第4巻第3号 1959年3月20日発行  
発行所 長野県大町市TEL(大町)211  
大町山岳博物館  
印刷所 大町市上中町  
信州印刷大町工場